

実践交流会 報告

多様性が活かせることばの教育実践 2025

～ 私の実践を語り・子どもの姿に学ぶ ～

<主旨>

日本語教育・支援の現場は、子どもたちも多様（言語・文化背景、来日の経緯や滞日期間、ことばの力や認知・学力の発達状態）であれば、教育・支援現場も多様（地域の多文化化の状況、組織・団体としての考え方、日本語教育・指導の仕組み、人的配置）、そして携わる者も多様（立場・教育経験・教育観・言語指導の知識・技能）です。その現場で、教員・支援員の皆さんは、子どもたちがことばを豊かに運用する力を高めるため創意工夫をして教育・支援活動を行っています。その皆さんが相互に実践を語り合い・学び合う場がこの実践交流会です。

自身の実践について語り、具体的なアイデアを共有するとともに、その背後にある子ども観、学習観、言語観を交差させながら、今後の実践を展開するための省察に基づく気づきと、新しい発想・次なるアイデアを得る空間にしたいと思います。参加される皆さんが、次なる「子どもたち・現場・教員の多様性が活かせる実践」に挑む契機となれば幸いです。

<日程・会場>

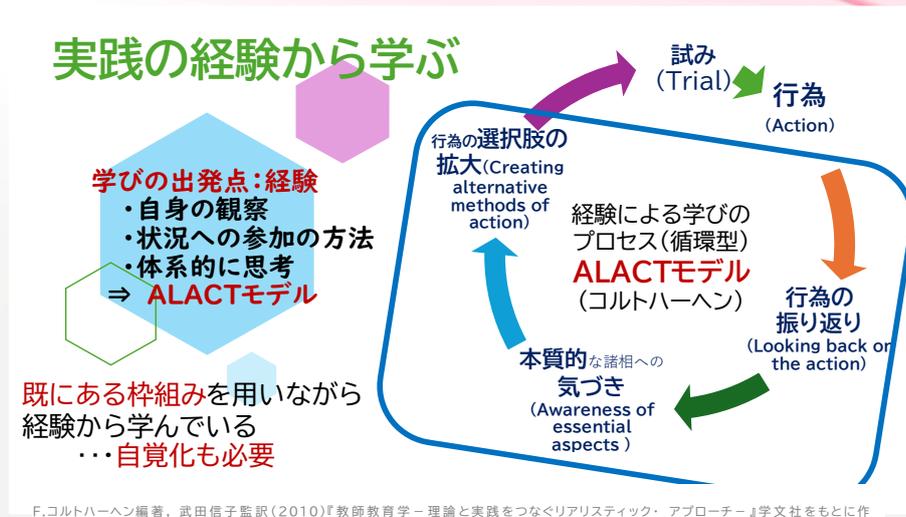
	日時	会場	参加人数
第1回	10月4日(土) 13:00～16:30	東京(東京学芸大学)	22人
第2回	10月19日(日) 13:00～16:30	名古屋(南山大学)	18人
第3回	11月1日(土) 13:00～16:00	神戸(のじぎく会館)	15人

< 実践交流会の構成(各回共通)>

1 実践交流会の趣旨の理解 主催者から趣旨説明と参加者の自己紹介を通じ、本研修が、参加者自身の実践について対話する、協働的な学びの場であることを理解する。	10分
2 実践に関する新たな学び 実践事例の紹介とその事例についての話し合い、あるいは、授業実践に関するワークショップを通じて、子どもの言語教育の場のデザインの方法に関する情報や実践を分析する見方を得る。	80分
3 実践交流(コルトハーヘンのALCTモデル※に基づき実施) ① 実践の紹介:自身の実践について具体的な資料(計画や教材、子どもたちの成果物や授業での子どもたちの参加の様子がわかるもの)を基に紹介し合う。 ② 実践を紹介し合う活動を通じて自身の実践について気づいたこと、他の参加者の実践から学んだこと・参考になったことを個人で振り返る。 ③ 全体で、振り返りを共有し、意見交換を行う。	120分

※F.コルトハーヘン編著、武田信子監訳(2010)『教師教育学－理論と実践をつなぐリアリティック・アプローチ』学文社

実践交流の実施前に、提示した関連資料



<実践事例紹介の進め方(東京会場の場合)>

- 1 グループで相互に実践を紹介する (1グループ3人・1人15分) × 2セッション
15分の実践紹介の構成
 - 1) 自身の実践の紹介:
 - ・取組(実践)前の問題意識: 子どもたち、あるいは教室の実態と設定した課題は何か。
 - ・取り組みの工夫: 課題解決のために具体的にはどのような工夫をしたか。
 - ・結果: 一定期間実施してみた結果、どうであったか
 - 2) 話し合い(質問・コメント)
- ↓
- 2 振り返り(ALACTモデルに即して)
 - 1) 各自、次の3点について振り返り、付箋に書き込みをする
 - ・自分の実践(行為:A)の新たな意味への気づき(行為の振り返り:L)
 - ・想像していなかった子どもの姿の発見(本質的な諸相への気づき:A)
 - ・実践のアイデアをありがとう(行為の選択肢の拡大:C)
 - 2) 書き込んだ付箋の内容を共有し、明日からのチャレンジについて話し合う(試み:T)。

<3回の実践交流会、それぞれのプログラム>

第1回(東京) 10月4日(日)	
13:00	開会・趣旨説明 研修資料 第1回実践交流会
13:10	実践事例紹介 小学校「JSLカリキュラム」の事例 田中寛子さん(目黒区立東根小学校) 中学校「道徳科」の事例 青山岳史さん(可児市立蘇南中学校)
14:30	実践交流 45分間のセッション×2回 一人15分ずつの紹介・質疑応答
16:00	振り返り 「実践を語ることで見えること・子どもの姿から学んだこと」
16:30	閉会 コーディネータ: 原瑞穂・齋藤ひろみ(東京学芸大学)、河野俊之(横浜国立大学)
第2回(名古屋) 10月19日(土)	
13:00	開会・趣旨説明 研修資料 第2回実践交流会
13:10	実践事例紹介

<p>こども園「文字指導」の事例 <u>井村美穂さん・森井えみさん(子どもの国)</u> 中学校「JSLカリキュラム」の事例 <u>中村夏帆さん(愛知県岩倉市立南部中学校)</u> 14:30 実践交流 45分間のセッション×2回 一人15分ずつの紹介・質疑応答 16:00 振り返り 「実践を語ることで見えること・子どもの姿から学んだこと」 16:30 閉会 コーディネータ: 河野俊之(横浜国立大学)、川口直巳(愛知教育大学)、 上田崇仁(南山大学)</p>
<p>第3回(神戸) 11月1日(日)</p>
<p>13:00 開会・趣旨説明 <u>研修資料 第3回実践交流会</u> 13:10 ミニワークショップ <u>「内容と日本語の統合学習のデザインー『JSLカリキュラム』の実践例からー」</u> 齋藤ひろみ(東京学芸大学) 14:30 実践の交流 45分間のセッション セッション1: 一人15分ずつの紹介・質疑応答 セッション2: ポスター発表形式 16:00 振り返り 「実践を語ることで見えること・子どもの姿から学んだこと」 16:30 閉会 コーディネータ: 齋藤ひろみ(東京学芸大学)、村松好子(梅花女子大学)、 浜田麻里(京都教育大学)</p>

<参加者の声(アンケートより)>

- ・事例報告(小学校)では、同じ教材を用いた場合でも、学年によって目標や指導の工夫が異なることを具体的に学ぶことができました。日頃の支援活動では時間的制約がある中で、つい一つひとつの活動を急ぎがちになってしまっているため、「繰り返しながら使う言語活動が大切だ」という言葉が特に印象に残りました。(東京)
- ・事例報告(中学校)では、現在支援している生徒がまさに「なぜ自分はここ(日本)で学ばなければならないのか」といった思いを抱いているように感じており、このような活動があることに感動しました。支援の視点や、生徒の言語力を客観的に捉えた資料は、「なんとなく」ではなく、根拠をもって支援の方向性を考えるうえで有用だと感じました。今後の活動では、こうした資料や評価の視点も積極的に活用していきたいと思います。(東京)
- ・交流の時間では、共通点のあるグループや同じ校種のグループの中で、自分の実践に対する建設的な意見をもらうことができました。日頃は、「これでいいのだろうか」と不安を抱きながら実践していることが多いのですが、「大丈夫」と背中を押してもらえるような勇気をもらうことができました。また、立場や環境は違って、子どもたちのために何ができるかを考えているという共通点を持った方々の実践を知ることができ、大きな刺激を受けました。表現したものを掲示したり、お互いに見せ合ったりすることで、発表する側にも見る側にも新たな学びや気づきがあることに改めて気づきました。今後の実践の中でも、こうした「他者に開く」取り組みをぜひ取り入れてみたいと思います。(東京)
- ・実践を話すことで、「自分が担当する生徒の良さ」に気づかせてもらった。うるさいほど自分の意見を話せるって素晴らしい。(名古屋)
- ・周りの方が褒めてくれて、あたり前だと思ってやっていた指導が工夫していたことだったと気づけて自信になりました。(名古屋)
- ・国語科の学習で戦争を扱う単元をあえて軽く扱ってきた気がする(難しいとか、きっとわからないだろう

という気持ちがあって)。逃げてはいけないと反省。(名古屋)

・JSLカリキュラムの指導案の立て方について理解がふかまりました。交流を通じて、自分に足りないものは教科につなげる日本語指導だと思いました。こどもたちとの関わりの中で教科につなげられる場面を見逃さず、適切なタイミングで日本語を教科学習につなげられるよう今後は意識したいと思いました。(神戸)

・昨年行った実践を発表しましたが、振り返りを通して、再度自分の実践について考えるいい機会になりました。実践をしたことに満足してしまい、この実践で培ったことをその後生かすことができていなかったことを改めて認識しました。(神戸)

<コーディネータより>

第1回(東京)

第1回の実践交流会への参加者22名で、小中高等学校で教員として日本語指導を担当なさっている方が約50%、学校で支援員として日本語指導に携わっている方が約20%、地域の支援活動をなさっている方が約30%でした。

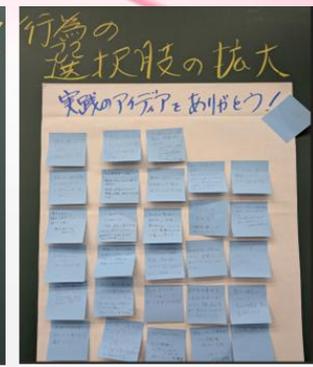
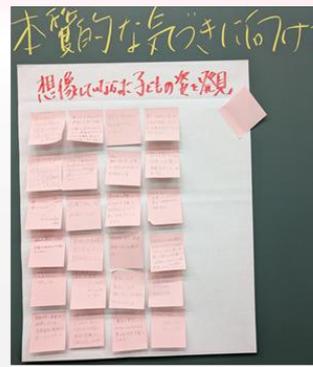
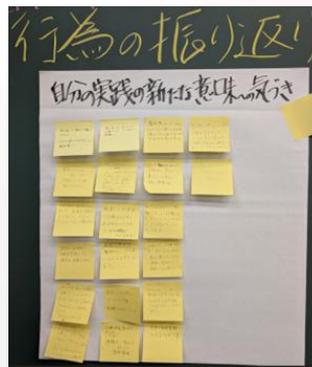
前半の実践事例の紹介は、田中寛子さん(目黒区立東根小学校)と青山岳史さん(可見市立蘇南中学校)に紹介いただきました。田中さんからは、「たんぽぽのちえ」(こくごニ上、光村図書)を用いて、生活科および理科と日本語の学習を結びつけるクロスカリキュラム、低学年から高学年の個々の児童の実態および発達段階を考慮した教科と日本語の目標、学習内容・活動を設定した授業をご紹介いただきました。青山さんには、「ぼくの物語 あなたの物語」(中学道徳3、光村図書)から展開した「わたしの物語を語ろう」の授業をご紹介いただきました。ストレスチェック調査と「ことばの力のものさし」による実態把握の上で、個々に応じたJSLカリキュラムの理解・表現・記憶支援等がありました。生徒一人一人が「わたしの物語」を紡ぎ、卒業を控えた生徒が自らの将来に希望を持って歩み出せるような手立てでした。

いずれも児童生徒の実態を多面的に捉えた上で、綿密に計画を練り、日本語の学習と教科の学習を統合させていくプロセスが示されました。参加者からは、「いずれも近い取り組みをしたことがあったが、自分の取り組みがいかにも中途半端であったかがわかった。定着を促し、次に繋げるための工夫をたくさん教えてもらった」等のコメントがあり、実践交流では自身の授業設計と対照させる視点を得られたと思います。

実践交流では、参加者から次のような実践例の紹介がありました。「1年生の日本語」「初期段階の日本語指導」等の日本語の基礎的な学習活動、「校歌を新入生に紹介する活動」「日本語学級紹介集会」等の自分の今の生活を伝える学習活動、「都道府県を調べよう」等の教科と日本語の統合学習、「自分の国と母語を紹介しよう」等の自己肯定感を喚起する活動、そして、母語と日本語による読み聞かせ活動等です。それぞれ関わっている児童生徒・現場の状況も、立場も異なる皆さんが、実

実践について熱心に語り合う姿が印象的でした。振り返りでは、「音読のゴールを児童にとって明確にすることが大事」「生徒自身が自分について気づき、教師も生徒について気づく、そんなきっかけになる活動だった」「教科と日本語の関係だけではなく、社会参加の力を高める必要がある」等が見られました。具体的な実践のアイデアのみならず、その実践を通じて子どもたちにどのような力を育む

ことが重要なのかという「本質的な問い」を含むもので、実践についての語り合いから大きな気づきが生まれていると感じました。参加者の皆さんには、これからの実践展開を、また、次回の交流会で紹介いただけたらと思いました。



(第1回実践交流会 運営:原瑞穂・齋藤ひろみ)

第2回(名古屋)

名古屋で開催した第2回実践交流会の参加者は18名で、小中高等学校で教員として日本語指導に当たっている方が約60%、学校で指導員として日本語指導に携わっている方が約23%、地域で支援活動を行っている方が約17%でした。

前半は、井村美穂さん・森井えみさん(子どもの国)と中村夏帆さん(愛知県岩倉市立南部中学校)による実践事例を紹介いただきました。井村さん・森井さんは、豊田市立のこども園6か所と保見公団での開催している幼児日本語教室「たけのこ」について活動方針や実践の内容や課題などをご紹介くださいました。これからさらに日本生まれや、就学前に来日する外国人児童生徒等が増えることから、ご紹介いただいた実践内容や課題からさまざまなことを考えることができました。中村さんは、中学3年生に対する国語+社会科+日本語「「子どもの権利条約」を読んで考えよう—個人の尊重と日本国憲法—」の授業をご紹介くださいました。外国人生徒はいろんな思いを持ってはいるが、言語化できないことがあるため、自分の本当の思いを言語化して、伝えたい相手に伝えられるようになってほしいということから「子どもの権利条約」(日本ユニセフ協会抄訳)を読み、意見交換をしたりプレゼンしたりするものでした。生徒の反応を予想することや教員の細やかなサポートについて学ぶことができました。



後半の、実践交流では、日本語指導・外国人生徒教育の体制づくりや学級づくりの取り組みや、在籍学級での学習支援、母語教室の取り組み、「教科と日本語の統合学習」の実践例等が紹介されました。振り返りでは、自身の実践の足りない部分に気づいたこと以外に「実践を話すことで、自分が担当する「生徒の良さ」に気づかせてもらった」などのコメントが見られました。愛知県ではこのような機会が少ないため、もっとこのような機会を得たいというコメントも多数ありました。

なお、第2回の実践交流会は南山大学・愛知教育大学の協力を得て、実施いたしました。

(第2回実践交流会 運営:河野俊之)

第3回(神戸)

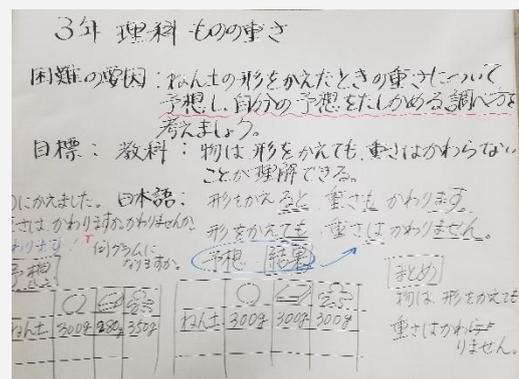
神戸で開催した第3回の参加者は15名で、小中高等学校で教員として日本語指導を担当している方が約50%、学校で指導員の立場で日本語に携わっている方が約20%、地域で支援活動を行っている方が15%、大学で日本語教育関係の授業を担当している方が約15%でした。

第3回は、他1回とは異なり、前半には、「統合学習 (JSLカリキュラム)」に関するワークショップを実施しました。ワークショップは、講師より「JSLカリキュラム」について20分ほど講義を行った後、小学3年生・理科・単元「ものの重さ」と、中学1年生・地理・小単元「変化する人口」の内容について、次の3つのステップでJSLカリキュラムの授業づくりを体験しました。

- ① その学習で「日本語学習中の児童生徒が内容の理解や活動参加に困難を感じるどころや、つまりきそうなところは、どこか」
- ② 「JSLカリキュラム」の考え方にに基づき、教科と日本語の目標を設定する。
- ③ 「探究」型の活動として何をするか、その活動にどのような日本語表現で参加を促すか、学習したことをどんな文章でまとめるかを、具体的に決定する。

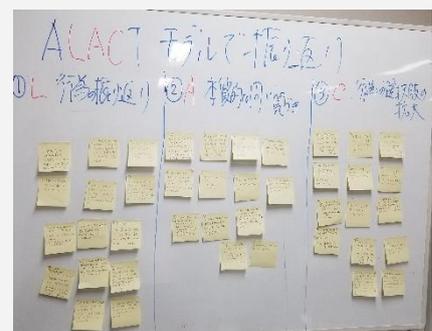
グループで上記のワークを行ったのち、その結果をポスターにして発表しました。たった100分のワークショップでしたので、じっくりと検討し、完成させることは難しかったのですが、それぞれの疑問点やアイデアを出し合いながら、グループごとの関心が反映した計画となり、グループ間での話し合いは非常に活気のあるものとなりました。

感想には「どうしても日本語が上達してから教科指導へという形にとらわれてしまっていたが、教科指導の中でどんな日本語指導をするかを考えることの大切さを実感した」等が寄せられました。



実践交流では、「校内体制とコンサルテーション」「ボランティア派遣事業」「教員研修」といった体制整備に関する取り組み、居場所づくりや人権教育の取り組み、「夏休み学習教室」の運営、また、「欲しい自転車コンテストへの応募」「私の住んでいた町紹介」といったプロジェクト型の日本の授業、「新聞記事」を活用した技能に着目した授業や教科学習への参加を志向した日本語の授業が紹介され、制度・仕組みから、日々の教室実践まで、バラエティに富む実践が集まりました。

振り返りでは、ALACTモデルに基づき、①自分の実践の新たな意味への気づき(行為の振り返り)、②想像していなかった子どもの姿からの気づき(本質的な気づき)、③実践のアイデアをありがとう(行為の選択肢の拡大)、という視点をもって話し合いをしました。「中高生向けの居場所、教科学習にもつながるような支援の場所を目指して、とにかくやってみようというスタンスで始めたが、本当にできていたのか?」「意外なところに興味を示し、ぐんと伸びた子どもがいました。どこに「気づき」が転がっているかわからないのでよく見ていこうと思いました。」「校内体制のお話を聞いて「0から1」(ないところから作る)のエネルギーは大いに必要だが、0(ゼロ)だからこそ自由に作れるかもしれないと感じた。できない理由ではなく、できる方法を!」等の気づきが語られました。参加者の皆さんは、それぞれの取り組みから、多くの示唆・ヒントを得られたようです。(終了後、振り返りは参加者間で共有しました)



私たちコーディネータ、また企画者も、ご自身の立場でチャレンジを重ねてきた参加者の皆さんの、社会的役割を強く意識した取り組みや熱意に、強く心を揺さぶられました。同時に、本質的な問いとして「この研修は、多様な現場・教育者/支援者がその経験や個性を活かして、子どもの多様性に応じた実践を実施できるようにデザインされているのか」に向き合いながら、次年度も実践交流に取り組まな

ければと、思いました。ありがとうございました。 (第3回実践交流会 コーディネータ: 齋藤ひろみ)

<紹介いただいた実践(ご本人より提供)>

会場	お名前・ご所属	実践事例のタイトル
東京	内野尚子さん (Universal KIDS オーストラリア)	ゲームで漢字を勉強する
東京	石原弘子さん(多言語絵本の会 RAINBOW)	母語と日本語をつかって、みんなで遊ぼう
東京	藤井瑞葉さん/日本語指導等協力者 (小田原市教育委員会派遣)	『語って書こう 心をひらく作文活動』
神戸	蔭山育子さん (大阪市教育委員会 日本語指導員)	クセのある物語文を読み解く
神戸	蔭山育子さん (大阪市教育委員会 日本語指導員)	説明文を頭の中でイラスト化する
神戸	下山知子さん (堺市立三原台中学校日本語指導センター)	「こんな自転車ほしかってん」コンテストに応募しよう。
神戸	新聖子さん(登録日本語教員)	新聞を活用した授業活動案(準備中)
神戸	森田美紀さん(丹波篠山市立 岡野小学校)	校内支援体制コンサルテーション
神戸	浦久仁子さん (堺市立三原台中学校 日本語センター)	お仕事条件ランキング